

# 特別企画

## 理学療法と障がい者スポーツの未来予想図 ～リオから東京へ～

会 場 第1会場 (2階 大ホール)

13:00～14:00

講 師

愛知医療学院短期大学

リハビリテーション学科 教授 鳥居 昭久

司 会

日本福祉大学 リハビリテーション学科 浅井 友詞

# 理学療法と障がい者スポーツの未来予想図 ～リオから東京へ～

愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 教授  
鳥居 昭久

スポーツを運動療法の一つとして取り入れられた歴史は古くからあると思われませんが、現在の障がい者スポーツの形になってきたのは、英国ストークマンデビル病院でのグッドマン博士の取り組みがスタートと言えるでしょう。グッドマン博士の取り組みは、現在のパラリンピックの発展の礎となっています。日本に於いても、故中村裕博士らの提唱で始まった大分国際車椅子マラソンをはじめ、全国障害者スポーツ大会など、障害者スポーツのイベントは確実に歴史を刻んでいます。そこに関わっている理学療法士も決して少なくはありません。しかし、多くの場合、特定の施設や、個人的に活躍していることが多く、組織的な関わりは十分では有りません。また、日本障がい者スポーツ協会や日本スポーツ振興センターの事業の中で、理学療法士が活動している場面も有りますが、理学療法士独自の活動ではなく、理学療法士協会などでの組織的な動きは少しずつ始まったところ です。

障がい者スポーツの特徴の一つとして、一般のスポーツと違って、すでに何らかの障害を有する人たちが取り組んでいることと、それを支援する人が必ず必要なことが挙げられます。しかし、一部の有力な選手以外では、障がい者スポーツ指導員、ボランティア、家族が支えているに過ぎないのが現実です。

私たち理学療法士は、障害という概念をしっかりと理解している資格であり、障がい者スポーツの現場には、理学療法士には力を発揮できる場面が非常に多くあります。つい最近まで、車椅子というだけで、公共のスポーツ施設を利用できないことが多かったのですが、少しずつ障がい者スポーツのフィールドは広がりつつあります。その場面に、障害のプロである理学療法士がたくさん関わることで、2020東京パラリンピックのみならず、近未来が開けてくる予感がしています。